中等教科 現代文典

上巻

375.9
Ha7
資料室

41858
教科書文庫
4
815
41-1912
20000
64971

375.9
H27
資料室

明治四十五年二月廿八日 文部省檢定濟 中學校國語科 中教科用書

文學博士芳賀矢一著

中等教科 現代文典

東京 合資會社 冨山房藏版

広島大学 教 64971 図書

緒言

中學教科細目の改正ありて國文法は三四學年に課することとなれり。よりて明治文典を訂正改刪して上下二卷とし、名づけて現代文典といひ、以て新教科要目の目的に合せしむ。

第一篇に品詞の分別を說き、第二篇に品詞相互の關係を說けるは明治文典に同じ。但し用言の活用は前には第一篇中に說きしが今回は之を第二篇に收め、第二篇中の動詞の自他及び客語補語に關する各章を刪除したり。國文法に於て動詞自他の辨をなすは全く西洋文典の模倣に出でたるものにして、國語としては何等必要なしと信じたればなり。

隨つて第三篇文の構造に於ても客語、補語の區別を廢したり。

余は將來の教科書の必ず此の式に出づべきを信じて疑はず。第四篇に正誤篇を加へたるは全部に就いて練習の功を積ましめ、複習を兼ねて實用を忘れざらしめんが爲なり。

一二學年に於ける參考書としては便宜余が國文典初步、五年用としては中古文典を參照せられんことを望む。

明治四十四年十二月

著者しるす

中等教科

現代文典　上卷　目次

第一篇　品詞の分別

第一章　口語と文語と單語……一
第二章　名詞……三
第三章　代名詞……五
第四章　數詞……七
第五章　動詞……一〇
第六章　形容詞……一三
第七章　副詞……一五
第八章　助動詞……一八
第九章　接續詞……二一

第十章　感動詞……二三
第十一章　助詞……二三
第十二章　十品詞及び品詞の轉成……二五

第二篇　品詞相互の關係

第十三章　體言と助詞との連結……二八
第十四章　動詞の活用……三五
第十五章　形容詞の活用附形容動詞……五二
第十六章　動詞活用の名稱及び意義……五七
第十七章　形容詞(附形容動詞)活用の名稱……六三
第十八章　助動詞の活用及び其の名稱……六五
第十九章　動詞と助動詞との連結……六七

第二十章　活用連語……七四
第廿一章　時、法、相の意義の轉換……八一
第廿二章　指定及び比較の助動詞の連結……八四
第廿三章　活用連語と助詞との連結……八六

附錄

活用連語表第一
活用連語表第二

中等教科 現代文典 上卷目次終

中等教科

現代文典 上卷

文學博士 芳賀矢一 著

第一篇 品詞の分別

第一章 口語と文語と單語

〔一〕

月が出る。
花が二つ三つ咲いた。
兎の耳は長い。
太郎が球を投げる。
ぽーとを漕がう。

月出づ。
花二つ三つ咲きたり。
兎の耳は長し。
太郎球を投ぐ。
ぽーとを漕がん。

お前の帽子は私のより小さい。
汝の帽子は余のより小さし。
樹の枝を折つてはならぬ。
樹の枝を折るべからず。

右の如く、吾等の用ゐる國語には、口語と文語との二つあり。吾等はこれより、文語の法則を學ばんとす。

〔二〕月、花、太郎、球、兎、耳、出づ、咲く、投ぐ、小さし、を、の、ん、より、ず、の如き、一つ一つの詞を單語といふ。

單語には物の名をあらはすものあり、物の性質をあらはすものあり、物の動作をあらはすものあり、又は他の詞に附屬して用ゐらるゝものあり。其の性質により、其の作用により、多くの種類に分たる。吾等は先づ其の分別を知らざるべからず。

名詞トハ
1. 人物　2. 場所　3. 物之部分　4. 形無キモノ　5. 度量　6. 物色　7. 物之量　8. 物之形狀　9. 物之性質　10. 事柄　11.

第二章　名詞

〔三〕月、花、兎、ぼーと、球、の如きは物の名なり。かくの如き詞を名詞といふ。

〔四〕太郎、次郎、義經、辨慶、亞細亞、富士山、朝鮮、滿洲、の如き、人物、場所の名は名詞なり。

〔五〕底、蓋、表、裏、の如きは、物の一部分の名にて、同じく名詞なり。

〔六〕風、雷、心、夢、春、夏、秋、冬、の如きは、形なきものゝ名にて、同じく名詞なり。

〔七〕里、町、間、尺、寸、貫、匁、圓、錢、厘、の如きは、度量の名にて、同じく名詞なり。

〔八〕白、黑、赤、青、幅、丈、長さ、厚み、大きさ、熱さ、涼しさ、の如きは、物の色、分量、形狀、性質の名にして、同じく名詞なり。

〔九〕幸福、熱心、勉强、の如きは、事柄の名にて、同じく名詞なり。

すべて事物の名稱として用ゐらるゝ語を名詞といふ。

練習一、左の文につきて名詞を指摘せよ。

イ　日西に沒し、月東に出づ。

ロ　宴を群臣に賜ひ、櫻花の詩を獻ぜしめらる。

ハ　僧雪舟、名は等楊、俗姓は小田氏、備中國の人。

ニ　青年は未來に生活し、壯者は現在に生活し、老人は過去に生活す。

ホ　學を修め、業を習ひ、智能を啓發し、德器を成就す。

ヘ　青は藍より出でて、藍よりも青し。

ト　死と悲と恨との跡を留むる墓の上。

チ　心に驕なきときは人を敬ふ。心に迷なきときは人を咎めず。

リ　口は禍の門。

第三章　代名詞

〔一〇〕「汝の帽子は余のよりも小さし」の汝、余は、それぞれの姓名の代りに用ゐたる語なり。かくの如き詞を代名詞といふ。

〔一一〕私、僕、余輩、君、先生、貴君、足下、閣下、の如きも、同じく姓名の代りに用ゐる語なれば、代名詞なり。

〔一二〕これ、それ、何（ナニ）、これら、それら、の如きは、物又は事をさして、其の名の代りに用ゐるものなれば、同じく代名詞なり。

〔一三〕こゝ、そこ、あすこ、かしこ、何處（ドコ）の如きは、場所をさしていふ代名詞なり。

〔一四〕こち、そち、こちら、あちら、の如きは方角をさしていふ代名詞なり。

すべて物の名稱の代りに用ゐる語を代名詞といふ。

練習二、左の文につきて、代名詞を指摘せよ。

イ　己の欲せざることは人に施すこと勿れ。

ロ　聖人にあらずんば誰か之をよくせん。

ハ　これも一時、かれも一時。

ニ　こゝかしこの見物に半日を費せり。

ホ　人は二人の主に事ふること能はず、これを惡み彼を愛し、これを親しみ、彼を疎んずべければなり。

ヘ　誰か烏の雌雄を知らん。

ト　いづれの國にも皆その國のしるしの旗あり。この日の丸の旗は日本國のしるしなり。

第四章　數詞

〔一五〕「花二つ三つ咲きたり」の二つ、三つ、は物の數をいふ語なり。五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、十、二十、百、千、萬、億、若干、幾何、數多、の如く、物の數をあらはす詞は皆數詞なり。

〔一六〕第一、第二、第三、第四、一つ目、二つ目、三つ目、第一號、第二號、第三號、の如きは、數にて事物の順序をあらはす語にて、同じく數詞なり。

〔一七〕雞一羽、長持一棹、家五軒、大砲八門、彈丸一千發の羽、棹、軒、門、發は、たゞ、數ふるために加へたる語にして、一つ、二つといふに同じ。又屏風一雙、ビール一ダース、の如く、一以上の數を一纒にしてあらはす數詞もあり。

〔一八〕酒一合、鯨尺一寸、金拾五錢、午前十一時二十分の合、寸、錢、時、分、等は名詞にして、其の上に數詞の添ひたるものなり。

數詞は名詞の上に添へて用ゐらるゝこと多し。

事物の數又は數の順序をあらはす語を數詞といふ。

練習三、左の文につきて數詞を指摘せよ。

イ　地球の表面の四分の三は海なりといへり。

ロ　一冊の定價十二錢五厘なり。

ハ　習慣は第二の天性なり。

ニ　生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。

ホ　在位二十五年、四十八歳にて位を皇太子に讓り給ふ。

ヘ　地球より太陽までの距離は一億四千八百十五萬四千キロメートルにして、太陽の容積は地球の百二十八萬倍なり。

名詞、代名詞、數詞の三つを總稱して體言といふ。

練習四、左の文より體言を摘出せよ。

イ　仰いで數ふ春星一二三。

ロ　一國文化の基礎は教育に在り。

ハ　富士山は海面を拔くこと一萬三千尺なり。

ニ　日本帝國臣民にして、滿十七歳より滿四十歳までの男子はすべて兵役に服するの義務あるものとす。

ホ　十二に八を乘じて六にて除せば、其の答幾何なるか。

ヘ　十一隻の軍艦は、舳艫相銜みて旅順港口に達す。

ト　鳥の歌、花の色にも多くの歡樂、樣々の教訓あるに非ずや。

チ　琴、笛、三味線、ピアノ、オルガン、唱歌などの音樂は通例謂ふ所の音樂なり。

第五章　動詞

〔一九〕「月出づ」「花二つ三つ咲く」「太郎書をよむ」の出づ、咲く、よむ、は動作をいひあらはしたる語なり。かくの如き語を動詞といふ。

〔二〇〕握る、つかむ、拾ふ、蹴る、躓く、走る、は手もしくは足のはたらきをあらはす動詞なり。

〔二一〕見る、にらむ、食ふ、嚙む、聞く、嗅ぐ、は目、口、耳、もしくは鼻のはたらきをあらはす動詞なり。

〔二二〕思ふ、慕ふ、悲しむ、苦しむ、感歎す、は心のはたらきをあらはす動詞なり。

〔二三〕浮ぶ、落つ、傾く、動く、移轉す、は物の動作をあらはす動詞なり。

〔二四〕保つ、壞る、裂く、沈む、進む、斷絶す、の如き動詞は、有形の物にも、無形の事柄にも用ゐらる。多くの動詞はみなしかり。

〔二五〕「茲に人あり」「宮城は東京に在り」の　ありの如く存在を

いひあらはす動詞もあり。

動詞は事物の動作又は存在をいひあらはす語なり。

練習五、左の文につきて動詞を指摘せよ。

イ　爾に出でたるものは爾にかへる。

ロ　夫婦相和し、朋友相信ず。

ハ　幹事は會長の指揮を受けて庶務を整理す。

ニ　民草は繁りに繁り、榮えに榮ゆ。

ホ　蠶は絲を吐き、蜂は蜜を釀す。

ヘ　亂を治むるは猶醫の病を治むるが如し。

ト　洒脫の筆、清新の色、些少の物を寫して逸興紙面に溢る。

チ　南風には水まさり、北風には水落つ。

第六章　形容詞

〔二六〕「兎の耳は長し」「汝の帽子は余のより小さし」の長し、小さし、は耳、帽子を形容せる語なり。かくの如き語を形容詞といふ。

〔二七〕長し、短し、細し、太し、輕し、重し、高し、低し、の如きは、事物の分量を形容する形容詞なり。

〔二八〕赤し、黑し、白し、青し、の如く、事物の色合を形容する形容詞もあり。

〔二九〕汚し、美し、甘し、醜し、賤し、貴し、の如く、事物の性質を形容する形容詞もあり。

〔三〇〕「耳長し」「價の高き店」の長し、高き、は體言の下につき

て形容せり。「長き耳」「高き山」といへば、體言の上につきて形容す。

【注意】「足の長き犬」といふときと「犬の長き足」といふ場合とを區別して考へよ。

體言の上又は下につきて、體言を形容するに用ゐる語を形容詞といふ。

【注意】小さき猫、大なる犬の、小さき、大なるはいづれも形容詞にして、小さきは普通の形容詞、大なるは形容動詞なり。形容動詞は尙後に學ぶべし。

練習六、左の文中より形容詞を摘出せよ。

イ　をかしく樂しきことも尠からず。

ロ　良藥は口に苦し。

ハ　死は鴻毛よりも輕く、義は泰山よりも重し。

ニ　父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。

ホ　時計の短き針は時を示し、長き針は分を示す。

ヘ　十六の三倍は六の八倍に等し。

ト　第一其の形正しく、第二其の色麗し。

動詞、形容詞を總稱して用言といふ。

第七章　副詞

〔三一〕人口最も多し　甚だ狹き路

正に其の業を卒へたり　よく飲み、よく食ふ

遙に富士山を望む

右の例にて遙に、最も、甚だ、正に、よく、はそれぞれの動詞、形容詞に副ひて、其の意味を限定するに用ゐらる。かくの如き語を副詞といふ。

〔三三〕副詞には今、しばし、嘗て、既に、現に、遂に、久々、の如く、時間の意味をあらはすものあり。

〔三三〕茲に、何處に、の如く、場所の意味をあらはす副詞もあり。

〔三四〕纔に、半、殆ど、甚だ、全く、の如く、分量度合をあらはす副詞もあり。

〔三五〕必、豈、亦、慥に、いづくんぞ、恐らくは、願はくは、の如く、斷定、推量、願望等の意味をあらはす副詞もあり。

〔三六〕いと靜にゆく。甚だ熱心に

右の例の　いと、甚だ、は、靜に、熱心に、の副詞を更に限定せるものなり。故に副詞は形容詞、動詞のみならず、又他の副詞を限定することありと知るべし。

副詞は用言又は他の副詞に副ひて、其の意味を限定する詞なり。

練習七、左の文より副詞を摘出せよ。又そのいづれの語を限定するかを話せ。

イ　山光水色また自ら一種の風致あり。

ロ　互に善を責むるは朋友の道なり。

ハ　弓馬の技皆蘊奥を極む。

二　遙に三保の松原を望み、漸くにして靜岡に着す。

ホ　王何ぞ必ずしも利をいはん、唯仁義あるのみ。

ヘ　曾て之を憂へしに、今果して然り。

練習八、左の文の空所に、適當なる副詞を補へ。

イ　圍を受くること八月城○○陷る。

ロ　一たび決心したることは○○成し遂ぐべし。

ハ　港と稱する處には○○波止場の設あらざるなし

ニ　鐵道を架設したれば兩地の往復○○便利なり。

ホ　理學を研究して○○其の名を著す。

ヘ　これより後外國船艦の往復するもの○○多し。

ト　恩賜の御衣今○○在り。

第八章　助動詞

〔三七〕太郎書を讀まず、次郎は書を讀みたり。

右のず、たり、は動詞の下に付きて、動詞の作用を助くる語なり。かくの如き語を助動詞といふ。

〔三八〕助動詞は單獨に用ゐらるゝことなし。必ず他の語の下に附屬して用ゐらる。今最も普通なるものを左に示さん。

1　「行かず」「行かざるなり」

2　「打たる」「捨てらる」

3　「打たず」「捨てざず」「打たしむ」

4　「行きたり」「行けり」「行きき」「行かん」

5　「行くべし」「行くまじ」

6　「行くなり」「美しきなり」「花なり」「將軍たり」

7　「行く如し」「花の如し」「湧くが如し」

〔三九〕右の中(6)のなりは形容詞にも體言にもつき、(6)のたりは體言にのみつく。(7)の如しはのがの下にもつく　助動詞はいくつも重ねて用ゐらるゝこと多し。

助動詞は一二の取除の外、動詞、又は他の助動詞の下に付きて、動詞の作用を助くる語なり。

練習九、左の文より助動詞を摘出せよ。

イ　學は疑ふにあらざれば明らかならず。

ロ　其の慘狀看るに忍びざるものあり。

ハ　かくの如くば書を讀むとも何の益あらん。

ニ　道の爲には重き身なり。私情の爲に命を棄つべからず。

ホ　はつ茸、松茸など木の根、落葉の下に求むべし。

ヘ　面あたり砲煙彈雨の大活劇を目擊する思あらしむ。

ト　奈良は元明天皇以後七代七十餘年間の帝都たり。

第九章　接續詞

〔四〇〕月又花

毛筆或は鉛筆にて認むべし

長くして且廣し

又、或は、且等は、語句を結付くる詞なり。かくの如き語を接續詞といふ。

〔四一〕「御話申上度候間」「久しく留學中の處」「之を知らずと雖も」などの間、處、雖も、の如く、語句に附屬して取離し難き接續詞あり。

〔四二〕「秦か漢かはた近代か」「月又花」のはた、又、の如き、其の他

並に、而して、然るに、然れども、などは、文の中より取除きても、文意に格別の差異を生ぜざる接續詞なり。

練習十　左の文中より接續詞を摘出せよ。

イ　物窮して又通ず。

ロ　濠太利亞の天産物中、動物及び植物は奇異なる種類に富むと雖も、經濟上有用なるもの極めて少し。

ハ　賴山陽名は襄、字は子成、山陽と號す。又三十六峯外史の別號あり。

ニ　詩文を以て名あり、然れども其の心を用ゐたるは經濟の學なり。

〔四三〕　あな恐しや

第十章　感動詞

あはれ一生の思出に……

嗚呼悲しいかな

の、あな、あはれ、嗚呼、の如きは、感動したるときに不意に言ひあらはす詞なり。かくの如き語を感動詞といふ。

第十一章　助詞

〔四四〕　樹の枝、我が心、球を投ぐ、人に與ふ、三つより多し、西へ行く。

右の例にての、が、を、に、より、へ、はそれぞれの語の下に付きて他の語との關係を示せり。かくの如き語を助詞といふ。

〔四五〕　書を讀めども、書を讀めば、書を讀むとも。

右のども、ば、とも、の如きは、用言の下につくのみにて、體言

の下につくことなし。

〔四六〕 助詞には種類多し。

(イ) 「人か鬼か」「誰かある」「いふかいはぬか」「人や先われや先」「ありやなしや」の「か」「や」の如き疑問の助詞もあり。

(ロ) 「豈圖らんや」「誰か之を信ぜんや」の「や」、「面白き月かな」「月を見るかな」の「かな」の如き感動の助詞もあり。

(ハ) 「月と花と」「見ると聞くとは大なる相違なり」「四郎は讀めども五郎は讀まず」の如き接續の助詞もあり。

尙其の外にも種々あり。

【注意】 助詞は形の上より別ちたる品詞の名にて、功用よりいへば、接續詞、感動詞等と同じきものを含めりと知るべし。

助詞は種々の詞の下につきて他の詞との關係を示し、又は其の作用を助くる詞なり。

第十二章　十品詞及び品詞の轉成

〔四七〕 以上學びたる所によりて、國語には名詞、代名詞、數詞、動詞、形容詞、副詞、助動詞、接續詞、感動詞、助詞の十種類あることを知れり。其の中、助詞、助動詞の二つは必ず他の詞の下に附屬して用ゐらるゝものにして、單獨にては意義をなさぬものなることを知れり。又體言、用言の名稱をも學びたり。

〔四八〕 名詞以下十種の詞を品詞といふ。卽、國語には十品詞の區別あり。かく品詞に分てるは、文法の說明上便利の爲な

れば、その間に相互の關係あることを忘るべからず。例へば、

1 光、霞、帶、笑、思、等は動詞の名詞となれるものなり。

2 僕、君、老兄、の如きは名詞の代名詞となれるものなり。

3 大人ぶる、蟲ばむ、嵩む、の如きは名詞より動詞となれるものなり。

4 全くす、辱くす、重くす、半ばす、の如きは形容詞或は數詞より動詞となれるものなり。

5 誠に、常に、こゝに、決して、以て、永く、の如きは名詞、代名詞、動詞若くは形容詞より副詞となれるものゝ例なり。

6 あはれの如きは名詞にして感動詞なり。

7 扨、また、の如きは副詞となるときもあり、接續詞となるときもあり。

練習十一、左の文につきて各語の品詞を辨別せよ。

イ　人生れて二十より三十に至るまでは、方に出づる日の如し。四十より六十に至るまでは、日中の日の如し。盛德大業この時期にあり。

ロ　清麿還りて奏して曰く、我が國開闢よりこの方、君臣の分自ら定まれり。天日嗣は必ず皇統を立つべし。敢て非望を抱くものは速に誅戮を加ふべしと。

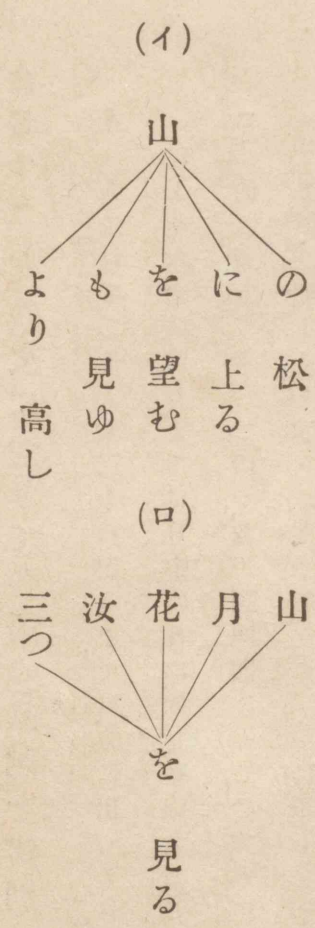
ハ　父母や我を生み、我を養ひ、我を長ぜしめ、我を敎ふ。これ無上の厚恩、何の日にか之を忘れん。

ニ　三千年の國體を維持し、國威を發揚せんことは、我等臣民たるものの務なり。

第二篇　品詞相互の關係

第十三章　體言と助詞との連結

〔四九〕



右の例の(イ)によりて、一つの體言が色々の場合に應じて種々の異なりたる助詞に連ることを知るべく、(又)ロによりて種々の體言が同一の關係を示すには常に同一の助詞に連ることを知るべし。

〔五〇〕
(1)(の)　樹の枝　三つの柿　汝の母
(2)(が)　我が家　三が一　君が代　君が歸るを送れば
(3)(を)　書を讀む　文を作る　五つを與ふ
(4)(に)　先生に問ふ　汝に與へん　二つに割る　六時に起く
(5)(へ)　東京へ行く　諸方へ通知す　前へ進む
(6)(より)　六時より始まる　獨逸より歸る　山より高し
(7)(まで)　九時まで勉強す　神戸まで行く

(8) (と) 酒と煙草とは衞生に害あり　三と二と合すれば五となる。

以上の助詞は最も普通に用ゐらるゝものにて、大方は日常の口語にも用ゐらるゝものなり。

【注意】

(イ) 太郎が球を投げる(口語)　太郎球を投ぐ(文語)

人が枝を折る(口語)　人枝を折る(文語)

口語にてかく用ゐる「が」は、文語にて全く省くべきものとす。但し

人が汝を愛するのを知らない

君が歸るのを送れば

といふ如く、口語にて下にのを添へたる語句の上にかゝるときは、文語にても、

人の汝を愛するを知らず

君が歸るを送れば

の如く、「の」或は「が」を附加ふるなり。

君が歸りし日

の如く、下に體言ある時も同樣なり。

(ロ) 東京に在り　東京へ行く

日西に沒す　船西へ行く

「に」は時間にもせよ、場所にもせよ、或定まりたる一點を示すに用ゐ、「へ」は方向を示すに用ゐる。この區別は、口語にては混同して用ゐらるゝこと多し。

(ハ) 漢書と史記とを讀む

漢書と史記との列傳を讀む

「と」は事物を並べて指定する助詞なれば、その並ぶる體言の下に一つづつ添

ふるものとす。右の例を見て、その異同を知るべし。口語にては下のとを省くこと多し。

【注意】附錄文法許容に關する事項第十三項を參照せよ。

〔五一〕 (1) これぞ日本一の名馬

(2) 生還するもの三人のみ。

(3) 祝ふ今日こそ樂しけれ

(4) 鳥ずら恩を知る

(5) 雨降り風さへ吹く

ぞ、こそ、のみ、は共に多くの中にて殊に一つの事物に重みを置きて用ゐる助詞なり。ずらは物を比較して輕きものを擧ぐるとき用ゐ、さへはあるが上に物の添はる意をいふとき用ゐる。口語のさへは文語のずらを用ゐるべきときに用ゐらるること多し。

この種類の助詞は、文の中より省きても、文の意味に格別の變化を起さず。

〔五二〕 雲か山か吳か越か

人やさき我やさき

蝶よ花よと育つ

さても降つたる雪かな

か、やは疑問、よは呼びかけ、感動、かなは感動に用ゐる。か、やも亦感動に用ゐることあり。

〔五三〕 これをば見よ

我には許せ

山よりも高し

何處までも見ん

これぞと思ふ

われこそは無官の大夫敦盛

右の如く、いくつもの助詞の重り合ひて用ゐらるゝこと多し。

かゝる場合には、それ〴〵の助詞の意味を重ねたるものなり。

〔五四〕口語にて綴る

一錢とてもなし

人にして人に非ず

人として鳥に如かざるべけんや

義經をして平氏を討たしむ

右の如くて及びしては直接に體言につゞかず、既にに、と又はをに連りたる體言につゞく。にて、にしては口語の「で」「であつて」の義なり。

第十四章　動詞の活用

〔五五〕太郎は讀まず

次郎は讀みたり

三郎も讀むか

四郎は讀めども五郎は讀まず

右の例にて、讀むといふ動詞の、場合によりて種々に其の形を變ずるを知るべし。之を動詞の活用といふ。

〔五六〕太郎は起きず

次郎は起きたり

三郎も起くるか

四郎は起くれども五郎は起きず

右の如く、讀むの代りに、起くといふ動詞を用ゐるときは、其の活用の形、前と異なるを知るべし。かくの如く、動詞の活用には種々あり。次に之を説明せん。

其の一。 四段活用、良行變格活用、奈行變格活用。

〔五七〕

讀 — まみむめも

取 — らりるれろ

右の如く、讀む、取るは五十音の行の四段にわたりて活用す。かくの如き動詞を四段活用の動詞といふ。

四段活用の動詞は頗る多し。その活用する行によりて、何行の四段活用といふ。讀むは麻行四段活用、取るは良行四段活用なり。他の動詞も皆之に準ず。

〔五八〕「讀まず」「取らず」「食はず」「飲まず」の如く、四段活用の動詞は打消の意を示さんとて、ず(口語ナイ又はヌ)に連るときは、常に、あ列の音を有す。

〔五九〕有りは打消を作るにも「有らず」となりて、活用する形のみを見れば、ら行四段活用と全く相同じ。左の表を見よ。

有 — らりるれろ

取 — らりるれろ

然れども四段活用動詞の「取る」に於ては「取り」といひては言切ること出來ざるに、「有り」は「茲に人あり」の如く、「あり」といひて言切ることを得。唯この點を異なりとす。

〔六〇〕「死ぬ」は「死なず」と、あ列の音より打消のずに連ることありを良行變格活用の動詞といふ。

四段活用に同じ。但し、「死ぬる人」「死ぬれば」と活くことありて、活用の形、四段活用よりも尚二つ多し。左の表を見よ。

死 — なにぬねの

る — ぬ

れ — ね

死なにぬぬるぬれね

死ぬを奈行變格活用の動詞といふ。

【注意】一　四段活用の動詞は、文語と口語とその活用全く相同じ。良行變格、奈行變格の動詞は、口語に於ては四段活用と同じくなれり。

二　奈行變格、良行變格の動詞は、現今最も普通に用ゐるもの、右に掲げたる二語のみなれば、之を記憶

して、其の他の語にて「あ」列の音より打消となるものは、すべて四段活用の動詞と知るべし。

三　居りも良行變格の動詞なれども、今は四段活用の如く用ゐる。

練習十二、左の動詞の活用を示せ。

書く　聞く　打つ　滅す（ホロボ）　起す（オコ）　保つ

言ふ　願ふ　編む　嚙む　賣る　散る

〔六一〕其の二　上二段活用、上一段活用。

猿木より落ちたり

猿木より落つ

猿も木より落つることあり

猿木より落つれば……

たちつてと

落

る　れ

右の如く「い」「う」の二列に活用し、更にその「う」列の音に「る」「れ」の添ひて活用する動詞あり。五十音の行の中にて上の二段に活用するを以て、上二段活用といふ。

〔六二〕落ちず　強ひず　悔いず

右の如く、上二段活用は打消の意を示すとき、常に「い」列の活用の形より連るものなり。

〔六三〕射る、鑄る、着る、煮る、似る、干る、見る、惟みる、鑑みる、居る、用ゐる、率ゐる、の十二語も亦打消を示すとき、射ず、

煮ず、用ゐず、などとなりて、上二段活用と同じく、ずの上に「い」列の音を有するものなり。これ等は「い」列の音のみにて「う」列に活用することなし。其の活用左の如し。

射　やいゆえよ　るれ

煮　なにぬねの　るれ

故に之を上一段活用の動詞といふ。

【注意】一　上二段活用は口語に於ては或地方を除きては全く上一段活用と同じくなれり。

二　上一段活用の動詞にて普通に用ゐるものは、上に擧げたるものゝみ。故に右の十二語を記憶し、

其の外の語にて「い」列の音より打消となるものは、すべて上二段活用の語と知るべし。

三　地方によりて「い」列の音と「え」列の音とを混同する所あり。注意すべし。

練習十三、左の動詞の活用を示せ。

見る　吹く　報ゆ　射る　煮る　着る　強ふ　吸ふ　乘る　斬る　起く　置く

練習十四、左の文より動詞を摘出して、その活用の種類を話せ。

イ　老を敬ひ、幼をいつくしみ、有德を貴び、無能をあはれむ。

ロ　忠言は耳にさかひ、良藥は口に苦し。

ハ　過ぎたるはなほ及ばざるが如し。

ニ　昔は東海道を行くに十二三日を費したり。

ホ　彈丸雨の如く飛び來れども、平然として各自の職務に從ふ。

ヘ　人生五十功なきを恥づ。

ト　この式濟みて後は、唯釣床をつりて眠に就くのみ。

チ　少年老い易く、學成り難し。

リ　外交の危機は已に去りて、一電遙に露都の公使館に飛べり。

〔六四〕

其の三。　下二段活用、下一段活用。

球を投げず

球を投ぐ

球を投ぐることあり

球を投ぐれば……

右の例を見よ。上二段活用の動詞と其の活用よく似たるに非ずや。

たゞ其の第一變化は「い」列の音を有せずして「え」列の音を有せり。之を表に示せば、

かぎ	
ぐ	投
げ	投
ご	投
る	
れ	

かく「え」「う」の二列に活用して、更にその「う」列に「る」「れ」の添ひて活用するものを、下二段活用といふ。

〔六五〕　痩せず　受けず　止めず　變へず

右の如く下二段活用の動詞は、打消に連るときは、常に「え」列の音を有すと知るべし。

〔六六〕蹴るの一語は、くと活くことなし。「け」、「ける」、「けれ」、と三様の活用形を有するのみ。故に之を下一段活用の動詞といふ。

蹴
かきくけこ
る れ

【注意】一　下一段の動詞は蹴るの一語のみ。

二　下二段活用の動詞は口語に於ては或地方を除きては下一段活用と同じくなれり。

練習十五、左の動詞を活用せよ。

枯る　刈る　兼ぬ　死ぬ　痩す　受く

浮く　消ゆ　越ゆ　諫む　納む　尋ぬ

恐る　始む　始る　流る　流す　分く

分つ　入る

練習十六、左の文の動詞を摘出して、その活用を示せ。

イ　農作物は皆枯れ果てゝ一年の收穫零となれり。

ロ　天は自ら助くるものを助く。

ハ　秋高く馬肥えたり。

ニ　己を責めて人を責めざれば恐なし。

ホ　敵將を仆さんと思ふものは、先づその馬を射る。

ヘ　心こゝに在らざれば聽けども聞えず、視れども見えず、食へども其の味を知らず。

ト　往くものは追はず、來るものは拒まず。

チ　鶯は幽谷を出でて喬木に遷る。

リ　學年は毎年四月に始りて、翌年の三月に終る。

其の四。　左行變格活用、加行變格活用。

〔六七〕

勉強せず
勉強したり
勉強す
勉強する時……
勉強すれば……

勉強 ─ さ／し／す／せ／そ
　　 ─ る／れ

右の例を見よ。下二段活用と其の活用甚だ相似たり。打消の場合に「え」列の音を有するも亦相同じ。但し「勉強したり」としに活くこと、下二段には無し。下二段は活用の形四つなるに、これは五つの活用形を有せり。故に之を左行變格の動詞といふ。

〔六八〕　左行變格の動詞は、「ず」(爲)の一語のみなり。然れども「罪ず」の如く名詞より動詞を作るは、多くはこの活用による。又「勉強ず」「スタデーず」の如く、漢語、外國語を國語の動詞

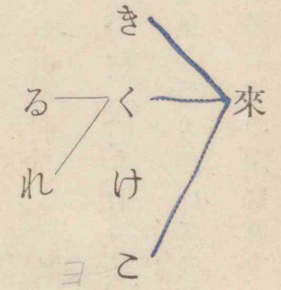
に轉用するときは、皆この活用によるを以て、今日にては、甚だ必要なる動詞なりと知るべし。

〔六九〕 歎ず　論ず　變ず　討ず　講ず

右の如く漢語の撥ぬる音、又は長く引く音の下には、大抵「ざ」行の活用となる。但し、その漢語二字以上になれば、感歎ず、議論ず、輪講ず、の如く、やはり清音を用ゐるものとす。

〔七〇〕 「詳にず」「明らかにず」「辱くず」「德とず」の如く、他の詞よりこの活用を造ること亦多し。

〔七一〕 「來」の一語は、打消をいふ場合には こず となりて「お」列の音を有す。これは左の如く活用す。



來を加行變格活用の動詞といふ。

練習十七、左の動詞の活用を示せ。

奏す　信ず　愛す　移轉す　斷絶す

以上學び得たる所によりて、動詞は其の活用によりて、左の九種に分るゝことを知る。

動
- 四段活用
- 上二段活用

詞の活用種類

- 下二段活用
- 上一段活用（十二語）
- 下一段活用（一語）
- 左行變格活用（漢語及び他の詞より來るものを除けば一語）
- 加行變格活用（一語）
- 奈行變格活用（一語）
- 良行變格活用（一語）

【注意】上一段以下の動詞は、其の數甚だ少ければ、之を記憶しおくべし。

練習十八、左の文句につきて動詞の活用を區別せよ。

イ　千里の馬も老いては駑馬に劣る。

ロ　衆多く其の議に應ず。右大臣岩倉具視獨り之を不可とす。

ハ　この日曩に沈没せる福井丸の船首に當りて、頭部に砲彈の大傷を被り、袖に金線の縫へる軍服を着し、望遠鏡を懸け、短劍を佩びたる日本海軍將校の死體を發見せり。

ニ　近來に至り古物を研究する學問大に進歩したり。之によりて研究するときは、よく古代人民の有樣を知ることを得。

第十五章　形容詞の活用　附、形容動詞

〔七三〕

水清く流る

川の水清し

清き水に嗽ぐ

水清ければ魚すまず

形容詞にも亦活用あること、これにて明らかなり。其の活用

は動詞の活用の如く、五十音の一行に止らずして、か行とさ行との兩行に跨りて活用す。

さしすせそ
かきくけこ　清
れ

〔七三〕形容詞には右の如く、(1)く、(2)し、(3)き、(4)け、れ、と四樣に活用する一種あるのみ。但し(1)く、(3)き、(4)け、れ、と活用するとき、其の上に「し」の音ありてしく、しき、しけれ、となるものは、(2)の時にしを重ねざるものとす。

悪　悪　悪　悪

し　し　し　し
く　○　き　け
(1)　(2)　(3)　(4)　れ

【注意】口語にては(2)(3)の活用いとなれり。

〔七四〕すべて形容詞は、第一段の「く」の活用形より良行變格活用動詞のありに連りて、

(善)　よから　よかり　よかる　よかれ
(悪)　あしから　あしかり　あしかる　あしかれ

と活用す。かく活用せる形容詞を形容動詞といふ。

〔七五〕「大に」「明らかに」「立派に」「慨然と」「滔々と」などはに、とよりありに連りて、「大なり」「明らかなり」「立派なり」「慨然たり」「滔々たり」の如く、形容動詞をなす。

大なら　大なり　大なる　大なれ

慨然たら　慨然たり　慨然たる　慨然たれ

【注意】一　形容動詞の活用は良行變格に同じ。

二　體言の上又は下につくと普通の形容詞に同じ。

三　「富士山なり」「我が志なり」などの如く、名詞よりなりに續く場合と混同すべからず。

練習十九、左の文より形容動詞を摘出し、その語のいづれの語を形容するかを話せ。

イ　物盛なれば必ず衰ふ。

ロ　池中の魚は河海の大なるを知らず。

ハ　四面皆山にして通路の不便少からず。

ニ　この圖は精密なれども、正確なりといふを得ず。

ホ　眞に勇猛なる士に非ずや。

ヘ　福運は常に勤勉なる人の側に傍ふこと、恰も順風穩波の航海に巧なるものに隨ふが如し。

第十六章　動詞活用の名稱及び意義

〔七六〕動詞の活用にはそれ〴〵の名稱あり、意義あり。奈行變格活用の動詞は六つの活用形を有するものなれば、之によりて說明するを便利とす。

第一活用形の「死な」は「死なば」と用ゐられて、未だ成立たぬことを假にいふ形なれば、未然形といふ。

第二活用形の「死に」は「死に損ふ」「死に難し」の如く、直ちに他

の動詞又は形容詞卽ち用言に連る形なれば、連用形といふ。

第三活用形の「死ぬ」は「人死ぬ」の如く言止むる形なれば、終止形といふ。

第四活用形の「死ぬる」は「死ぬる人」「死ぬる時」の如く、體言の上につゞく形なれば、連體形といふ。

第五活用形の「死ぬれ」は「死ぬれども」「死ぬれば」の如く、或條件の已に成立せるを許していふ時に用ゐる形なれば、已然形といふ。

第六活用形の「死ね」は命令をいふときに用ゐる形なれば、命令形といふ。

奈行變格には以上六つの活用形あり。同一の方法を以てこの六種の形に他の活用の動詞をあてゝ考へ見よ。

〔七七〕四段活用の動詞には四つの活用形あるのみなれば、讀まば、讀み難し、讀む人、讀めども、讀めとなりて、終止と連體とは同形、已然と命令とは同形なるを知る。

未然	連用	終止 連體	已然 命令
よま	よみ	よむ	よめ

〔七八〕良行變格活用の動詞も、同じく四種の活用形を有し、「あらば」「あり難し」「あり」「ある人」「あれども」「あれ」となりて、連用と終止と同形を有することのみ、四段活用に異なり。

未然	連用 終止	連體	已然 命令
あら	あり	ある	あれ

〔七九〕上二段活用、下二段活用の動詞には四種の活用形あり。

第一活用に於て、未然、連用、命令の三つを兼ぬ。但し命令

には「よ」といふ助詞を付くべし。

	終止	連體	已然
未然 連用 命令	おき	おく	おくる　おくれ
	すて	すつ	すつる　すつれ

〔八〇〕上一段活用、下一段活用の動詞は三種の活用形あるのみなれば、第一活用にて三役を兼ぬる外、第二の活用形にて、終止、連體の二役を兼ねたり。命令に「よ」を添ふること前に同じ。

	終止 連體	已然
未然 連用 命令	み	みる　みれ
	け	ける　けれ

〔八一〕左行變格、加行變格活用の動詞は五つの活用形を有するを以て、第一の未然形にて命令を兼ぬるのみなり。但し、命令に「よ」を添ふること前に同じ。

	終止	連體	已然
未然 命令	感ぜ	感じ	感ずる　感ずれ
	こ	き	くる　くれ

【注意】一　口語動詞の活用には終止連體の區別なきを以て、文語に於てもこの二者を混同し易し。注意すべし。

二　動詞の連用形は名詞となる形なり。

練習二十、左の活用形の名稱を問ふ。

食は　信じ　願ふ　見え

立ち　起くる　得る　恥ぢ
棄つ　燒くる　流す　書け
及第す　卒業せ

練習二十一、左の動詞の六種の活用形を記せ。

持つ　禁ず　堪ふ　着る　悔ゆ
止む

練習二十二、左の文に誤あらば正せ。

イ　私慾を制すことは難く、放逸に流ることは易し。
ロ　今や秋高く、馬肥ゆ時なり。
ハ　人、才智なきときは、業を執り身を立つこと能はず。
ニ　疾病流行して、死すもの多し。
ホ　感慨極りて涙のみ流るゝ。
ヘ　金鞍の公子は之を以て輿車の代とし、或は之を競爭せしめて娯樂の用に供する。

第十七章　形容詞（附、形容動詞）活用の名稱

〔八二〕前課に於て學びたる六種の活用に形容詞をあてゝ考へ見よ。

善くば……未然
善くあり……連用
善し……終止
善き人……連體

善けれども……已然

故に形容詞の四つの活用形に於ては、未然形にて連用を兼ぬることを知る。形容詞には命令形の活用なし。

未然連用	終止	連體	已然
よく	よし	よき	よけれ

【注意】口語の形容詞活用には、終止、連體の區別なし。

〔八三〕形容動詞はいづれも良行變格と同じく活用するを以て、其の役目の分擔も全く良行變格の活用に同じ。これには命令形もあり。

未然	連用終止	連體	已然命令
よから	よかり	よかる	よかれ
詳なら	詳なり	詳なる	詳なれ

整然たら　整然たり　整然たる　整然たれ

第十八章　助動詞の活用及び其の名稱

〔八四〕助動詞にも亦活用あり。其の活用は動詞、形容詞と同じく各段の名稱を有す。

動

(一)	未然連用命令	終止	連體	已然
1	れ	る	るる	るれ
2	られ	らる	らるる	らるれ
3	せ	す	する	すれ
4	させ	さす	さする	さすれ
5	しめ	しむ	しむる	しむれ

下二段活用に等しきもの

(二) 未然 連用 終止 連體 已然 命令

(1) なら なり なる なれ

(2) たら たり たる たれ

(3) ら り る れ

(4) べから べかり べかる べかれ

良行變格活用に等しきもの

【注意】□は現今用ゐぬ印なり。

(三) 未然 連用 終止 連體 已然

(1) 可く 可し 可き 可けれ

(2) 如く 如し 如き 如けれ

形容詞の活用に似たるもの

(四) 未然 終止 連體 已然

ん め

(五) 未然 終止 連體 已然

(六) 未然 連用 終止 連體 已然

せ き し しか

ず す ぬ ね

第十九章 動詞と助動詞との連結

其の一 動詞の時

〔八五〕「讀ま」は未然、「讀み」は連用、「讀む」は終止、連體、「讀め」は已然、命令なり。今左の如く助動詞と連りたる例を見よ。

(1) 讀まる

(2) 讀みたり

(3) 讀むべし

(1)は受身の意味をあらはして、未然の意なし、(2)は「たり」の助

動詞につゞきて用言には連らず、(3)は「べし」の助動詞につゞきて終止せず。これ等の例にて、未然、連用等の名稱は、活用の唯一つの功用につきての名なるを知るべし。動詞の種々の活用形には、尙助動詞に連るべき他の役目あり。助動詞は獨立しては其の意味をなし難く、動詞は助動詞の助なければ種種の作用をいひあらはし難し。故にこの各種の活用形より、種々の助動詞に連りて、各種の連結を形造るなり。以下次第に之を說かん。

〔八六〕雨やむ　鳶とぶ

「やむ」「とぶ」の如き單純なる動詞にては、現在に起る動作をいひあらはすことを得れども、過去に起りし動作、又は未來に起るべき動作をいひあらはすこと能はず。故に時の助動詞を附加へて動作の時間の關係を明瞭にす。

(イ)雨やみたり。
(イ)雨やめり。
(ロ)雨やみき。
(ハ)雨やまん。
(ニ)雨やみたりき。
(ホ)雨やみたらん。

(イ)は動作の今正に終れることを示す。故に現在完了の時といふ。(ロ)は動作の過去に終りしことを示す。之を過去の時といふ。(ハ)は動作の未來に起るべきことを示す。之を未來の時といふ。(ニ)は完了の時と、過去の時と重なりたるもの。(ホ)は完了の時と、未來の時と重なりたるものにて、卽ち(ニ)は過

去の或時に於て動作の已に完了せることを示し、(ホ)は未來のある時に於て動作の完了し居る事を豫定して示す。故に過去完了、未來完了の時といふ。是に於て動詞の時には左の六種の區別あることを知る。

1　讀む　　現在

【注意】現在は過去、未來等に對していふ。時をいふ必要なき場合には、時の助動詞を採らざれば、同じくこの形を用ゐる。以下皆之に倣ふ。

2　讀みたり　　現在完了

3　讀めり　　過去

4　讀みき　　過去完了

5　讀みたりき　　未來

6　讀まん　　未來完了

【注意】「やみぬ」の如く用ゐるぬも亦完了の時を示せども、現代の文には終止形の外殆ど用ゐず。

其の二　動詞の法

〔八七〕余等は既に動詞の時を示す方法を學べり。然るにこれにては動作をありのまゝに述べて、たゞ動作の起る時間を明瞭にし得るのみ。若し「讀むだらう」の意にて推量をあらはし、「讀む筈だ」の意にて義務をあらはす如き、種々の意をあらはさんには、法の助動詞との連結を形造らざるべからず。

(イ)　讀むべし　　讀むだらう　　推量の法

(ロ)　讀むべし　　讀む筈だ　　義務の法

(ハ) 讀むべし　讀むことが出來る　能力の法
(ニ) 讀むべし　讀め　命令の法

べしを附加へて右の如き種々の意味を示すことを得。

【注意】命令法は「讀め」といふ命令形にてもいひあらはすことを得。

其の三　動詞の式

〔八八〕動作を否定し、之を打消す助動詞にはず又はざりあり。

讀む	肯定の式	
讀まず	否定の式	
讀まざり		

【注意】讀まざりは終止形に於て現代文に用ゐること稀なり。

其の四　動詞の相

〔八九〕時のあらはし方、法のあらはし方、否定のあらはし方等は、動作をなすかたにつきての種々の用法なり。然るに「人に打たる」「路に棄てらる」の如くるらるの助動詞を添ふれば、他より動作を受くる受身の意をあらはし、「打たす」「棄てさす」「歸らしむ」の如くす、さす、しむを加ふれば、他に動作をなさしむる使役の意味をあらはし、「打たせらる」「棄てさせらる」「歸らしめらる」の如く「せらる」「させらる」「しめらる」を加ふれば、人に動作せしめらるゝ使役の受身を示す。之を動詞の相といふ。この關係を示せば、

(イ)	通常の相	讀む	讀む
(ロ)	受身の相	讀まる	讀まれる
(ハ)	使役の相	讀ます（しむ）	讀ませる
(ニ)	使役の受身の相	讀ませらる（しめらる）	讀ませられる

第二十章　活用連語

〔九〇〕前章に於ては、動詞と一つ一つの助動詞との連結を學べり。此等各種の助動詞は、必要に應じてそれ〴〵重ねて用ゐらるゝが故に、動詞の助動詞との連結は極めて多樣となるなり。例へば法を示すと同時に、時を示さんか、

(イ) 推量の法（四つの時）

現在	讀むべし　讀むだらう	現在完了	讀みたるなるべし　讀めるなるべし
	讀むなるべし	過去	讀みしなるべし　讀んだらう
		過去完了	讀みたりしなるべし

【注意】口語にては、現在完了、過去、過去完了の區別なし。

(ロ) 義務の法（三つの時）

現在	讀むべし	讀む筈だ
過去	讀むべかりき	讀む筈であつた
未來	讀むべからん（べけん）	讀む筈だらう

【注意】べからんは約りてべけんとも用ゐらる。

(ハ) 能力の法（三つの時）

現在	讀むべし	讀むことが出來る
過去	讀むべかりき	讀むことが出來るのであつた
未來	讀むべからん（べけん）	讀むことが出來よう

【注意】これは助動詞にて能力をいふ場合なれども、現今の文にては「讀み得」「讀むことを得」の如く、得といふ動詞を以て能力を示すこと多し。

(ニ) 命令の法（一つの時）

現在　讀むべし　（未然形ニ命令ス）

〔九一〕時と法と連結せる上、更に式を加ふれば、

（イ）推量の法

現在　讀まざるべし　讀まざるなるべし　讀まないだらう

過去　讀まざりしなるべし　讀まなかつただらう

（ロ）義務（ハ）能力の法

現在　讀むべからず　（ロ）讀んではならぬ　（ハ）讀めん

過去　讀むべからざりき　（ロ）讀んではならなかつた　（ハ）讀めなかつた

未來　讀むべからざらん

（ニ）命令の法

現在　讀むべからず　（ロ）讀んではいけなからう　（ハ）讀めなからう

〔九二〕義務を示すものに限り一層其の意を強くするため、二重

の打消を取ることあり。二重の打消なれば、意味は肯定になるなり。

現在　讀まざるべからず　讀まなくてはならぬ

過去　讀まざるべからざりき　讀まなくてはならなかつた

未來　讀まざるべからざらん　讀まなくてはならぬだらう

【注意】助動詞のまじは推量の法と否定の式とを兼ねたるものにして、口語のまいに當る。

〔九三〕受身相、使役相、使役受身相の動詞も亦時、法及び式の助動詞に連ることを得。別表第一に就いて之を見るべし。

【注意】否定式の動詞の使役相となるものあり。その活用は第二表について知るべし。

練習二十三、左の動詞につきて時と法との助動詞を連結

せよ。

崩す　流す　言ふ

練習二十四、第一表により、左の動詞のあらゆる連結を示せ。

取る　知る　學ぶ

〔九四〕ら行變格と同じき活用を有する形容動詞は、亦助動詞に連結して時、法、式相を有すること動詞の如し。

	(肯定)	(否定)
現在	詳なり	詳ならず
過去	詳なりき	詳ならざりき
未來	詳ならん	詳ならざらん

〔九五〕法を加ふれば、

(イ) 推量の法

現在	詳なるべし	詳ならざるべし
過去	詳なりしなるべし	詳ならざりしなるべし

(ロ) 義務　(ハ) 能力の法

現在	詳なるべし	詳なるべからず
過去	詳なるべかりき	詳なるべからざりき
未來	詳なるべからん(べけん)	詳なるべからざらん

〔九六〕又使役の相を有することを得。

現在	詳ならしむ	詳ならしめず
現在完了	詳ならしめたり	
過去	詳ならしめき	詳ならしめざりき

過去完了　詳ならしめたりき
未來　詳ならしめん　詳ならしめざらん
未來完了　詳ならしめたらん

【注意】使役の相も亦種々の法を有することを得。繁を避けてこゝに擧げざれば、類推して之を知るべく、疑はしくば第二表に就いて之を知るべし。

〔九七〕月明らかにして星稀なり

擧止閑雅にして容姿美麗なり

形容詞は文の半途にあるときは、右の如く本のありに連らぬ形より、しての助詞に連ることと多し。

用言と助動詞との連結せるものを活用連語といふ。

戰ヰ
時相法式
一一一一
カ通ヽ肯
コ常ヽ定

本時（未來）
ん轉時
法（推量）

練習二十五、左の連結の相、式、法を問ふ。

美しからず　強壯ならざるべからず

練習二十六、なかりの形容動詞のあらゆる連結を示せ。

第廿一章　時、法、相の意義の轉換

〔九八〕未來　讀まん……讀まう

未來完了　讀みたらん……讀んだらう

使役相の未來　讀ましめん……讀ませよう

能力法の未來　讀むべからん……讀める筈だらう

右の如く未來の時を示すすべての連結は、口語にても、文語にても推量の法を示すにも用ゐらるゝなり

これ時の助動詞の法の助動詞に轉じたるなり。

〔九九〕推量の法　讀むべし　讀むだらう
推量の否定　讀まざるべし　讀まないだらう

右の口語に照しても明瞭なる如く、推量法は亦未來の時として用ゐらるゝことを知るべし。これ法の助動詞の時の助動詞に轉じたるものなり。

〔一〇〇〕受身の相　讀まる　讀まれる
使役の受身の相　讀ませらる　讀ませられる

右の口語に照しても明瞭なる如く、受身、又は使役の受身は、敬語として用ゐらるゝことを知るべし。又敬語は動詞の給ふを助動詞に用ゐて使役相の下につけ、
讀ませ給ふ
といふこともあり。古文にては敬語相のみにても敬語となるなり。

これ相の助動詞の敬語の助動詞に轉じたるものなり。

練習二十七、左の連結の意味を口語にて述べよ。

イ　佐藤先生は去年獨逸國より歸朝せられたり。
ロ　新聞雜誌も備へありて、居ながら歐米各國の近狀も知らるゝなり。
ハ　書籍室は船の前方に在り、凡そ二十疊を敷くべし。
ニ　毎日千字づゝ書出すべしと命ぜられたり。
ホ　今の境遇にて正式の學校に入學せんことおもひもよらず。
ヘ　蟻の擧動を觀察せよ。彼等の身長よりは幾十倍もあらんかと思ふ昆蟲をも運搬し行くなり。
ト　來十日午前八時御出門、陸軍士官學校へ行幸仰出ださる。

チ　昔フリードリッヒ大王この木の下にて民の訴を聽かれたりとて王の木の名あり。

第廿二章　指定及び比較の助動詞の連結

〔一〇一〕知りしなるべし
知りたりしなるべし

右の如く推量の法にはなりの助動詞の用ゐらるゝことをいへり。元來この助動詞は勢を強め、或は指定する意味を有する助動詞にて、各種の用言連語は、皆最後に「なり」の形を有することを得るなり。左の例を見よ。

讀む……讀むなり。
讀みたり……讀みたるなり

讀ます……讀まするなり
讀ませず……讀ませざるなり
讀まるべし……讀まるべきなり
讀ませられざるべし……讀ませられざるべきなり
美しかりき……美しかりしなり
美しからざりき……美しからざりしなり

〔一〇二〕正成は忠臣なり
三つと二つとの和は五つなり
舜も人なり、我も人なり
我は我なり、彼は彼なり

右の如く「なり」は體言の下にもつゞくことを知るべし。

〔一〇三〕父父たらざれども子子たり

これは何たることぞ

右の如く「たり」は體言にのみつくものなり。

なり、たりの二つを指定の助動詞といふ。

〔一〇四〕天女を見るが如し

花の如し

右の如く體言よりはの、用言よりはがに連り、然る後比較の助動詞「如し」に續く。但し、用言の場合にはがを省くこともあり。

第廿三章　活用連語と助詞との連結

〔一〇五〕

の　花を見るの記　何ぞ思はざるの甚だしき

が　信ずべきが如し　甚だしかりしが如し

を　知らざるを知らずとせよ　論ぜざるを得ず

に　忍耐の久しきに驚く

へ　餘り疎遠なるへは通知せず

より　日の出づるより

まで　日の沒するまで

と　愛すると愛せざると　小なると大なると

は　今の世に生れたるは大なる幸なり

も　行くも歸るも別れては

ぞ　何故なるぞ

こそ　言はざるこそよけれ

のみ　馬前まざるのみ

か　行くか歸るか　旅順は何時陷落すべきか。

や　余の始めて學校に入學するや

よ　面白き事を見たるよ。　この繪のうつくしきよ、

かな　いふべきかな。

右の如く體言の下につきたる助詞(第一章參照)はすべて用言活用連語の下にも添ふことを得るなり。

〔一〇六〕花咲かば告げん　無くば幸なり

樂あれば苦あり　遠ければ行かず

悔ゆれども及ばず　廉なれど品惡し

如何なる事ありとも　如何に美麗なりとも

花咲きて散る　上書して諫む

右の「ば」「ど」「ども」「とも」「て」も、體言には附屬せざる助詞にて、用言、活用連語のみに附屬す。

ばは前後相應ずることに用ゐ、ど、ども、とも、は前と後と相背くときに用ゐる。ては前と後とを接續するものなり。

〔一〇七〕終日待ちたるが何の音便もなかりき

日はまだ暮れざるにはや暗くなれり

今日降るべしとは思はざりしを

右の「が」「に」「を」は前項に擧げたるものと異なり、用言若くは活用語にのみ續くものにて、體言には續かず、前の事と後の事と相背く場合に用ゐる。

廣島縣立廣島商業學校
豫科第二學年甲組 金村保三

中等教科 現代文典 上卷終

活用連語表第一

活用連語表第一

相	法／式	肯定	否定
通常ノ相	通常ノ法	現在 讀ム 現在完了 讀ミタリ 過去 讀ミキ 過去完了 讀ミタリキ 未來 讀マン 未來完了 讀ミタラン	現在 讀マズ 現在完了 讀マザリキ 過去 讀マザリキ 過去完了 讀マザリシナルベシ 未來 讀マザラン 未來完了 讀マザリシナルベシ
	推量ノ法	現在 讀ムベシ 讀ムナルベシ 現在完了 讀ミタルナルベシ 過去 讀ミシナルベシ 過去完了 讀ミタリシナルベシ	現在 讀マザルベシ 讀マザルナルベシ 現在完了 讀マザリシナルベシ 過去 讀マザリシナルベシ 過去完了 讀マザリシナルベシ
	義務能力ノ法	現在 讀ムベシ 過去 讀ムベカリキ 未來 讀ムベカラン	現在 讀ムベカラズ 過去 讀ムベカラザリキ 未來 讀ムベカラザラン
	義務（二重打消）ノ法	現在 讀マザルベカラズ 過去 讀マザルベカラザリキ 未來 讀マザルベカラザラン	
	命令ノ法	現在 讀ムベシ	現在 讀ムベカラズ
受身ノ相	通常ノ法	現在 讀マル 現在完了 讀マレタリ 過去 讀マレキ 過去完了 讀マレタリキ 未來 讀マレン 未來完了 讀マレタラン	現在 讀マレズ 現在完了 讀マレタリ 過去 讀マレザリキ 過去完了 讀マレザリシナルベシ 未來 讀マレザラン 未來完了 讀マレザリシナルベシ
	推量ノ法	現在 讀マルベシ 讀マルナルベシ 現在完了 讀マレタルナルベシ 過去 讀マレシナルベシ 過去完了 讀マレタリシナルベシ	現在 讀マレザルベシ 讀マレザルナルベシ 現在完了 讀マレザリシナルベシ 過去 讀マレザリシナルベシ 過去完了 讀マレザリシナルベシ
	義務能力ノ法	現在 讀マルベシ 過去 讀マルベカリキ 未來 讀マルベカラン（ベケン）	現在 讀マルベカラズ 過去 讀マルベカラザリキ 未來 讀マルベカラザラン
	義務（二重打消）ノ法	現在 讀マレザルベカラズ 過去 讀マレザルベカラザリキ 未來 讀マレザルベカラザラン	
	命令ノ法	現在 讀マルベシ	現在 讀マルベカラズ
使役ノ相	通常ノ法	現在 讀マシム 現在完了 讀マシメタリ 過去 讀マシメキ 過去完了 讀マシメタリキ 未來 讀マシメン 未來完了 讀マシメタラン	現在 讀マシメズ 現在完了 讀マシメザリキ 過去 讀マシメザリキ 過去完了 讀マシメザリシナルベシ 未來 讀マシメザラン 未來完了 讀マシメザリシナルベシ
	推量ノ法	現在 讀マシムベシ 讀マシムルナルベシ 現在完了 讀マシメタルナルベシ 過去 讀マシメシナルベシ 過去完了 讀マシメタリシナルベシ	現在 讀マシメザルベシ 讀マシメザルナルベシ 現在完了 讀マシメザリシナルベシ 過去 讀マシメザリシナルベシ 過去完了 讀マシメザリシナルベシ
	義務能力ノ法	現在 讀マシムベシ 過去 讀マシムベカリキ 未來 讀マシムベカラン（ベケン）	現在 讀マシムベカラズ 過去 讀マシムベカラザリキ 未來 讀マシムベカラザラン
	義務（二重打消）ノ法	現在 讀マシメザルベカラズ 過去 讀マシメザルベカラザリキ 未來 讀マシメザルベカラザラン	
	命令ノ法	現在 讀マシムベシ	現在 讀マシムベカラズ

命令ノ法			
命令ノ法	現在	讀ムベシ	讀ムベカラズ
義務（二重ノ打消）	未來	讀マザルベカラザラン	

受身ノ相

通常ノ法	現在	讀マル	讀マレズ
	現在完了	讀マレタリ	
	過去	讀マレキ	讀マレザリキ
	過去完了	讀マレタリキ	
	未來	讀マレン	讀マレザラン
	未來完了	讀マレタラン	
推量ノ法	現在	讀マルベシ 讀マルルナルベシ	讀マレザルベシ 讀マレザルナルベシ
	現在完了	讀マレタルナルベシ	
	過去	讀マレシナルベシ	讀マレザリシナルベシ
	過去完了	讀マレタリシナルベシ	
義務能力ノ法	現在	讀マルベシ	讀マルベカラズ
	過去	讀マルベカリキ	讀マルベカラザリキ
	未來	讀マルベカラン（ベケン）	讀マルベカラザラン
義務（二重ノ打消）	現在	讀マレザルベカラズ	
	過去	讀マレザルベカラザリキ	
	未來	讀マレザルベカラザラン	
命令ノ法	現在	讀マルベシ	讀マルベカラズ

使役ノ相

通常ノ法	現在	讀マシム	讀マシメズ
	現在完了	讀マシメタリ	
	過去	讀マシメキ	讀マシメザリキ
	過去完了	讀マシメタリキ	
	未來	讀マシメン	讀マシメン
	未來完了	讀マシメタラン	
推量ノ法	現在	讀マシムベシ 讀マシムルナルベシ	讀マシメザルベシ 讀マシメザルナルベシ
	現在完了	讀マシメタルナルベシ	
	過去	讀マシメシナルベシ	讀マシメザリシナルベシ
	過去完了	讀マシメタリシナルベシ	
義務能力ノ法	現在	讀マシムベシ	讀マシムベカラズ
	過去	讀マシムベカリキ	讀マシムベカラザリキ
	未來	讀マシムベカラン（ベケン）	讀マシムベカラザラン
義務（二重ノ打消）	現在	讀マシメザルベカラズ	
	過去	讀マシメザルベカラザリキ	
	未來	讀マシメザルベカラザラン	
命令ノ法	現在	讀マシムベシ	讀マシムベカラズ

使役ノ受身ノ相

通常ノ法	現在	讀マシメラル	讀マシメラレズ
	現在完了	讀マシメラレタリ	
	過去	讀マシメラレキ	讀マシメラレザリキ
	過去完了	讀マシメラレタリキ	
	未來	讀マシメラレン	讀マシメラレザラン
	未來完了	讀マシメラレタラン	
推量ノ法	現在	讀マシメラルベシ 讀マシメラルルナルベシ	讀マシメラレザルベシ 讀マシメラレザルナルベシ
	現在完了	讀マシメラレタルナルベシ	
	過去	讀マシメラレシナルベシ	讀マシメラレザリシナルベシ
	過去完了	讀マシメラレタリシナルベシ	
義務能力ノ法	現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベカラズ
	過去	讀マシメラルベカリキ	讀マシメラルベカラザリキ
	未來	讀マシメラルベカラン（ベケン）	讀マシメラルベカラザラン
義務（二重ノ打消）	現在	讀マシメラレザルベカラズ	
	過去	讀マシメラレザルベカラザリキ	
	未來	讀マシメラレザルベカラザラン	
命令ノ法	現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベカラズ

活用連語表第二

(一) 否定式ヨリ使役相ニナレル動詞ノ活用連語（九三節注意參照）

常ノ相			使役ノ相			
推量ノ法	現在	詳ナルベシ	通常ノ法	現在	詳ナラシム	
	過去	詳ナリシナルベシ		現在完了	詳ナラシメタリ	
				過去	詳ナラシメキ	
				過去完了	詳ナラシメタリキ	
				未來	詳ナラシメン	
				未來完了	詳ナラシメタラン	
義務能力ノ法	現在	詳ナルベシ	推量ノ法	現在	詳ナラシムルナルベシ	現在 詳ナラシムルナルベシ
	過去	詳ナルベカリキ		過去	詳ナラシメシナルベシ	過去 詳ナラシメザリシナルベシ
	未來	詳ナルベカラン（ベケン）	義務能力ノ法	現在	詳ナラシムベシ	現在 詳ナラシムベカラズ
				過去	詳ナラシムベカリキ	過去 詳ナラシムベカラザリキ
				未來	詳ナラシムベカラン（ベケン）	未來 詳ナラシムベカラザラン
義務（二重ノ打消）	現在	詳ナラザルベカラズ	義務（二重ノ打消）	現在	詳ナラシメザルベカラズ	
				過去	詳ナラシメザリキ	
				未來	詳ナラシメザラン	

活用連語表第二

(一) 否定式ヨリ使役相ニナレル動詞ノ活用連語（九三節注意參照）

相	法／式	肯定
通常ノ相	通常ノ法	現在 讀マザラシム 現在完了 讀マザラシメタリ 過去 讀マザラシメキ 過去完了 讀マザラシメタリキ 未來 讀マザラシメン 去未完了 讀マザラシメタラン
	推量ノ法	現在 讀マザラシムベシ 現在完了 讀マザラシメタルナルベシ 完了 讀マザラシメシナルベシ 過去完了 讀マザラシメタリシナルベシ
	義務能力ノ法	現在 讀マザラシムベシ 過去 讀マザラシムベカリキ 未來 讀マザラシムベカラン（ベケン）
	命令ノ法	現在 讀マザラシムベシ
受身ノ相	通常ノ法	現在 讀マレザラシム 現在完了 讀マレザラシメタリ 過去 讀マレザラシメキ 過去完了 讀マレザラシメタリキ 來未 讀マレザラシメン 未來完了 讀マレザラシメタラン
	推量ノ法	現在 讀マレザラシムベシ 現在完了 讀マレザラシメタルナルベシ 過去 讀マレザラシメシナルベシ 過去完了 讀マレザラシメタリシナルベシ
	義務能力ノ法	現在 讀マレザラシムベシ 過去 讀マレザラシムベカリキ 未來 讀マレザラシムベカラン
	命令ノ法	現在 讀マレザラシムベシ

注意

(1) この表に擧げたる連語は使役の相としてはシムに連るのみにてス、又はサスに連る事なし。

(2) この表に擧げたる連語は完了時のヌに續かず。

(3) 指定の助動詞ナリ、タリ（第廿二章參照）はこの表の(二)の如き活用連語をなすものと知るべし。

(4) ベカリより使役になれる活用連語は(一)に準じて知るべし。

(二) 形容動詞ノ活用連語（第廿章參照）

相	法／式	肯定	否定
通常ノ相	通常ノ法	現在 詳ナリ 過去 詳ナリキ 未來 詳ナラン	現在 詳ナラズ 過去 詳ナラザリキ 未來 詳ナラザラン
	推量ノ法	現在 詳ナルベシ 過去 詳ナリシナルベシ	現在 詳ナラザルベカラズ 過去 詳ナラザリシナルベシ
	義務能力ノ法	現在 詳ナルベカリキ 未來 詳ナルベカラン（ベケン）	現在 詳ナルベカラズ 過去 詳ナルベカラザリキ 未來 詳ナルベカラザラン
	義務（二重ノ打消）	現在 詳ナラザルベカラズ	
使役ノ相	通常ノ法	現在 詳ナラシム 現在完了 詳ナラシメタリ 過去 詳ナラシメキ 過去完了 詳ナラシメタリキ 未來 詳ナラシメン 未來完了 詳ナラシメタラン	現在 詳ナラシメズ 過去 詳ナラシメザリキ 未來 詳ナラシメザラン
	推量ノ法	現在 詳ナラシムルナルベシ 過去 詳ナラシメシナルベシ	現在 詳ナラシメザルナルベシ 過去 詳ナラシメザリシナルベシ
	義務能力ノ法	現在 詳ナラシムベシ 過去 詳ナラシムベカリキ 未來 詳ナラシムベカラン（ベケン）	現在 詳ナラシムベカラズ 過去 詳ナラシムベカラザリキ 未來 詳ナラシムベカラザラン

(二) 形容動詞ノ活用連語（第廿章ニ照）

相	通常ノ相					使役ノ相			
法／式	通常ノ法	推量ノ法	義務能力ノ法	義務（二重ノ打消）		通常ノ法	推量ノ法	義務能力ノ法	義務（二重ノ打消）
定	現在 詳ナリ 過去 詳ナリキ 未來 詳ナラン	現在 詳ナルベシ 過去 詳ナリシナルベシ	現在 詳ナルベカリキ 過去 詳ナルベカリキ 未來 詳ナラン（ベケン）	現在 詳ナラズルベカラズ		現在 詳ナラシム 現在完了 詳ナラシメタリ 過去 詳ナラシメキ 過去完了 詳ナラシメタリキ 未來 詳ナラシメン 未來完了 詳ナラシメタラン	現在 詳ナラシムルナルベシ 過去 詳ナラシメシナルベシ	現在 詳ナラシムベシ 過去 詳ナラシムベカリキ 未來 詳ナラシムベカラン（ベケン）	現在 詳ナラシムベカラズ
否定	現在 詳ナラズ 過去 詳ナラザリキ 未來 詳ナラザラン	現在 詳ナラザルベシ 過去 詳ナラザリシナルベシ	現在 詳ナルベカラズ 過去 詳ナルベカラザリキ 未來 詳ナルベカラザラン	現在 詳ナラシメズ 過去 詳ナラシメザリキ 未來 詳ナラシメザラン		現在 詳ナラシメザルナルベシ 過去 詳ナラシメザリシナルベシ	現在 詳ナラシムベカラズ 過去 詳ナラシムベカラザリキ 未來 詳ナラシムベカラザラン	現在 詳ナラシムベカラズ 過去 詳ナラシムベカラザリキ 未來 詳ナラシムベカラザラン	

相	通常ノ相					受身ノ相			
法／式	通常ノ法	推量ノ法	義務能力ノ法	義務（二重ノ打消）		通常ノ法	推量ノ法	義務能力ノ法	命令ノ法
定	現在 讀マレザラシム 現在完了 讀マレザラシメタリ 過去 讀マレザラシメキ 過去完了 讀マレザラシメタリキ 未來 讀マレザラシメン 去未完了 讀マレザラシメタラン	現在 讀マレザラシムベシ 現在完了 讀マレザラシメタルナルベシ 完了 讀マレザラシメシナルベシ 過去完了 讀マレザラシメタリシナルベシ	現在 讀マレザラシムベシ 過去 讀マレザラシムベカリキ 未來 讀マレザラシムベカラン（ベケン）	現在 讀マレザラシムベカラズ 過去 讀マレザラシムベカラザリキ 未來 讀マレザラシムベカラザラン		現在 讀マレザラシム 現在完了 讀マレザラシメタリ 過去 讀マレザラシメキ 過去完了 讀マレザラシメタリキ 來 未 讀マレザラシメン 未來完了 讀マレザラシメタラン	現在 讀マレザラシムベシ 現在完了 讀マレザラシメタルナルベシ 過去 讀マレザラシメシナルベシ 過去完了 讀マレザラシメタリシナルベシ	現在 讀マレザラシムベシ 過去 讀マレザラシムベカリキ 未來 讀マレザラシムベカラン	現在 讀マレザラシムベシ
否定	現在 讀マレザラズ 過去 讀マレザラザリキ 未來 讀マレザラザラン	現在 讀マレザルベシ 過去 讀マレザリシナルベシ	現在 讀マレザルベカラズ 過去 讀マレザルベカラザリキ 未來 讀マレザルベカラザラン			現在 讀マレザラシム 現在完了 讀マレザラシメタリ 過去 讀マレザラシメキ 過去完了 讀マレザラシメタリキ 來 未 讀マレザラシメン 未來完了 讀マレザラシメタラン	現在 讀マレザラシムベシ 現在完了 讀マレザラシメタルナルベシ 過去 讀マレザラシメシナルベシ 過去完了 讀マレザラシメタリシナルベシ	現在 讀マレザラシムベシ 過去 讀マレザラシムベカリキ 未來 讀マレザラシムベカラン	現在 讀マレザラシム

注意

(1) この表に擧げたる連語は使役の相としてはシムに連るのみにてス、又はサスに連る事なし。

(2) この表に擧げたる連語は完了時のヌに續かず。

(3) 指定の助動詞ナリ、タリ（第廿二章參照）はこの表の(二)の如き活用連語をなすものと知るべし。

(4) ベカリより使役になれる活用連語は(一)に準じて知るべし。

明治四十四年十二月十一日印刷
明治四十四年十二月十四日發行
明治四十五年二月廿二日訂正再版印刷
明治四十五年二月廿五日訂正再版發行

中等教科 現代文典
上卷 定價 金貳拾貳錢
下卷 定價 金貳拾貳錢

著作權所有

改正定價 貳拾六錢

著作者 芳賀矢一

東京市神田區裏神保町九番地
發行兼印刷者 合資會社 富山房
同所 合資會社富山房社長

代表者 坂本嘉治馬

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷所 博進堂印刷所

東京市神田區裏神保町九番地
發行所 合資會社 富山房
電話本局一〇三六番本局四一三〇番
振替貯金口座東京五〇一番

HAGA 檢 賀芳